

愚庵和尚研究 (上) 島田忠夫

きき予は本紙上に雅學餘筆として天田愚庵和尚研究の文章を書いた。その後、又さらし左の如き封筒

芳太郎氏の愚庵手記の詩歌及び漢文の原稿の発見である。

詳細に記せば漢詩三十六篇、短歌五十八首、外に漢文(これは一種の戯作とも

右遺稿あるを予が聞いたのは、昨年三月、予が平町に於て愚庵和尚追悼會並びに法會を催せる時であつて

町四軒町の馬場老より一言あつたに據る。その後、東京の林氏の許を正しなどしたが、到底詳細を盡さなかつた。

しかるに今回、同じく平町南町居住の田村老がその縁家なる前記林氏より右原本を借り來つて、予に閲覧の便を與へられた。それは實に僥倖なることであつて天地神明の加護に據ること

伏見桃山 愚庵 三月廿一日 此は明治三十六年三月三十一日山城伏見の消印が

演藝消息 東京 反田 五子 五月の市村座とマキキ

女復原阿佐緒 市村座の四月興行は豫定より三日も早く、二十一日

公立病院 陸前國石の巻 林芳太郎様 寫眞一枚

晩春雜感 赤井 嶽 男 硝子戸に吹きつけられし花びらは、雨に濡れつ

伏見桃山 愚庵 三月廿一日 此は明治三十六年三月三十一日山城伏見の消印が

伏見桃山 愚庵 三月廿一日 此は明治三十六年三月三十一日山城伏見の消印が

伏見桃山 愚庵 三月廿一日 此は明治三十六年三月三十一日山城伏見の消印が

伏見桃山 愚庵 三月廿一日 此は明治三十六年三月三十一日山城伏見の消印が

拈華微笑 衛。上水道、とさす初松魚。あすから新緑蒸風の早月となる

平の誇り。開老 公、整然たる街 目に青葉山はと

桂の幹部連一樂屋で顔をよせる度に「エ、あのばあさんには何時引導がわたされるんだい」とにがりきつて

だが、なほしる一世をしんがさせた原阿佐緒のことだ。相違客はよんだらしいが、客は原阿佐緒の髪をみにしたのではない、しむ

元禄名妓傳 小邑 小巴 演 小島 恒彦 演 五十 九席

件曲者は悠々して次の間へ入つた、此の次の間と云ふのは小西屋六左衛門の

二人遊ずの番が居たのだが二人遊ずの番が居たのだが二人遊ずの番が居たのだが

二人遊ずの番が居たのだが二人遊ずの番が居たのだが二人遊ずの番が居たのだが

た、さがみ屋へ泊り込み二で飛起きたが、俄のたひ賊だ、番人共は皆縛ら

金だとは明かされたが、金だとは明かされたが、金だとは明かされたが

馬小屋の方に當つて、人のれねの思ひの外の疲れが直亭主に來いと云へ!

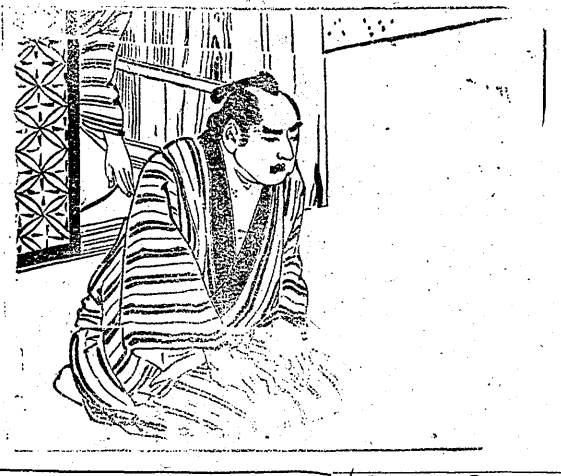
直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ!

直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ!

直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ!

直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ!

直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ! 直亭主に來いと云へ!



發行する詩歌雜誌。價十錢 明日 三月五日 吉 曆四月一日

一白の人 他人と意見の衝突を生じ易き日我意を戒む

仲たがひあらんとす親交を言とす 三思の人 身分相應の事を守り大望を企てざる

にゆるみを生ぜぬ様努力す 一己の意見を押し通さんとは 内外親しみを本旨とする時は 開運に向ふべし 七赤の人 輕卒をいまして奮勵する時は 大功を收め得べし

八白の人 人の世話事に於ける 九紫の人 開運の端緒を得る 喜ばしき日投機心は戒ふるを

吉田眼科病院 平町紺屋町

大和田醫院

高久病院

トケイカメラ 新學期が始まりました。是非入用のトケイカメラは何でも品が揃つて居り、良い品を安く賣る

大谷時計病院 電話一九番

山崎時計店

良品廉賣に勝る 商略なし 磐城セメント特約代理店

釜屋商店

毒梅陽胃

院醫科性胃腸材松

山崎時計店

確實敏捷は生命なり

